

熊澤蕃山の教育思想下

後藤 三郎

五 教育の方法

蕃山の教育法に關する思想を最も簡明に表明したものは、和書卷五にある次の語であらう。曰く

しゆることなくて其固有と時とにしたがふなり。(同書、三)

と。今この文意を分析する時、その思想は明に、しゆることなくき自由主義——その本質は自發主義である——と、其の固有に従ふ個性主義と、その時に従ふ自然主義との三となる。今先づ氏の遺文につきて自由主義自發主義の思想を求めると

童蒙は養て神知の開くるを待べし。(同書、三)

といふのがある。神知の開くるを待べしといふところ、強いてする開發教育でもなく、無論詰込教育でもなく、自由にして自然の發露を待つ趣旨を見ることができ。但しそれも決して、單に生ずるを待つ放任主義ではなくて、養てといふところ、正しき

意味の開發助長のあることが知られる。故に又曰く、

よく幼童を養育するものは、我童蒙に求むるにあらず、童蒙我に求む。(同書、三ウ)

と。兒童の自發を教育の理想としてゐることが一層明かに知られる。然らばその養ふといひ養育すといふの内容又は方法は如何。それは即ち一には自然主義であり、二には個性主義である。自然主義につきて蕃山の説くところ左の如し。

それ慈父は幼童と共に戯れ、不知不識善を導き、知覺のひらくるに隨ひて、ともにおとなしく成云々。(同書、五ウ)

と。即ち時に隨つてその方法の異なるべきをいふ。幼童には戯れ(註)成童にはおとなしくすべしといふ。所謂主觀的自然主義である。

(註)こゝに戯れといふは如何なる意味であるか。それはいふまでもなく子供の善良なる遊び相手となること、子供をよく成長させるために親も子と共に遊ぶの意で、子供を玩弄視し、又は子供の性に同じてその悪性を増長させるの謂ではない。故に曰く、舊友の幼少の子の土あそびするを見て、あしき事するていましめけるに告て云、これあしき事に非ず、彼が今のしわざなり。其うへ土なぶりは脾胃をも養ふべし。云々、奴僕をうてたゞけなどいふたはぶれあり。おさなき子の手なればいたみもせず、腹も立す、奴僕もたはぶれていたきぞかなしきぞないへば、子いよく勝にのりぬ。これ人のいたみをいたむの本心をそこなへり。此心習性と成て成人の後氣隨になり、妻子をいかりのゝしり、下人をうちはしらかしなどする悪行の根と成、朋友には相勝相争の慢心となりぬ。(中略)。これ皆幼少の時より父母奴僕の教へならはせる所に出たり。終には父母にも不孝になり、家人のあだとなる事を不知。(和書卷十五、廿六ウ)

と。同様の戒は師藤樹の鑑草にも見えてゐる。(藤樹先生全集三、四〇八―九頁参照)

故に又いふ、

いまだ道理をわきまふべき知覺もひらけ給ふまじきときに、しゐて善をせむれば、かへりて善根をくじくためしあり。學問などをしふれば後に學問きらひになる人あり。たゞ善事を以て大かきをして、不善のたぐひを見せ奉らず、いましめざれども不善なく、つとめざれども善にならひ給ふ様にすべし。天地の間に春いたりぬれば春にあそばざる人なく、善事家にみちぬれば、善をたのしまざる人なき道理なり。(外書卷一、二)

と。即ち時未だ至らざるに妄に善を責め學問を強いれば、後來却て善根をくじき、學問きらひになる虞あり。故によき環境に沐浴させて、彼等のよき性能の自ら發し來るを待てといふのである。但しかくても尙惡の兆したる時は如何。曰く、

程子云、惡は其微なる時に止べし。盛にして後禁する時は勞してしかもやぶれあり云々と。(中略)子も成人にしたがひて教有べし。俗にもまぐべき時に曲ざればこはく成て制しがたしといひ、古人もおこれる子の用べからざるがごとしといへり。(和書卷十五、廿三)

と。即ち、その時に従ふの意、善には養つてその發し來るに従ひ、惡にはこれを止むるにその微なる時に於てすの二義を有するを知る。

從て蕃山は早教育又は速成主義には反對であつた。曰く、

心友問云、今の世の幼少の子は、大方知藝能あるがごとし。むかしはきかざりし秀たる様なる者おほし。しかるに世間の人は次第にをとりゆく事はこゝろえがたき事にて侍り。答云、しかり、田にうふる稻も晚稻ほど取實おほし。今時の子其の利根なるは、稻の早稻のごとし。おとなに成ほど知惠の取實すくなし。其上平人の利發といふ物は、大方鈍なる物也。わらはべの爪くはへして赤面し、人前にてものいひかぬるは、知あきらかにして恥の心ある故也。人に存するものは恥心よりよきはなし。恥の心明らかなるものは、學問しては君子の地位にもいたり、たとひ無學にても平生は人がらよく、軍陣にては武勇のはたらき有もの也。むかしのわらわべどもには爪くはへする者おほかりし故に、成人に隨ひて一役の用に立ものありき。今のわらはべは人おめせず、人前にても利發にもものいひ、立ぬふるまひよし。この故に成人する程用人に選ぶべき人すくなし。人の親たる者徳をしらざれば、恥心ある子をばしかりをとして恥心を亡し、恥心なき子をばほめ愛してい

よくほこらしむ。賢才は日々におとろへ、驕吝は日々長ずる所也。かなしむべし。(同書、十)

と。ませたるは利發に見えても實は恥心なく淺薄であり、恥心だにあれば物の用には立つ、この心を養はざれば、賢才は日々におとろへ驕吝は日々長ず、かなしむべきことであるといふ。質實な意見といふべきであらう。故に又十五歳以下の童子の教育に於て、優れるものゝ取扱について次の言がある。

今十五以下の童子百餘人を聚め教ふる者あらむ。其中の秀才一二人知覺はやくひらけたるありて、成人の法を立むことを望むとも、師たる者知あらば、一二人のたみに大勢のあたはざる事をなすべからず。知覺はやくき者にはいよく内に省み、實をつとむることを示すべし。衆童の才長じ、知ひらけて、もとめ催す志をむかへて大人の道を習はすべし。しからば秀才の者も、才にひかれず、識に滯らずして、實の徳をなすべし。(中略)若秀才を好して衆童のあたはざる事をしむば、秀才は己が人に優れるにほこり、才にはせ、知識にひかれて、つゐに不祥人とならむ。衆童は學に倦み道を厭て、學校の政のやみなんことをねがふべし。其の君師さり其時過なばあとかたなくならむか。(和書卷五、四)

と。かくして蕃山の思想は、自己修徳の態度に於けると等しく、教育の方法に於ても亦所謂天才主義ではなくて、謙抑主義又は堅實主義であつたことが知られる。

(註)この思想は一見個性主義の教育に反するかの如く見える。併しその關するところは十五以下の童子である。人は個性によつて生きなければならぬが個性の固まるのは青春期以後である。故に青春期以前の童子は寧ろ一般的基礎陶冶を興へらるべきである。これは近時の個性教育論者の通説のやうである。蕃山の説も十五以下専ら充實せる基礎陶冶をなすべく、徒に才に馳せて輕薄なる人を作るなどいふ意味に解すれば、至極尤もな議論となる。

以上の思想に基づいて蕃山は次の如き教材觀を立ててゐる。

三四五歳の童は義の端すこしあらはれてものはぢする心あり、知の端すこしひらけて美惡をわかつ心あり、しかれどもいまだ義不義を辨へず、善惡是非をしるに及ばず、六七八歳にをよびて辭讓の心生ず、故に聖人八歳に至るを待て小學に入れ給ふ。(和書卷五、三)

武士の子は八九歳より學に入て、其子の成易き事よりをしへ、手習ひは一日に一字づゝ習はしむ。筆道に得たる者教るときは成易し。

十一二より經傳をよましむ。(中略)よむに苦勞になく、今少し多くよみたきと思ふほどに教る也。八九歳の子はいまだよまざれども、傍にてよむこゑおのづから耳に入て益になるものなり。

手習と文字よみと日をかへて教べし。(よみ物手習、おきなき人に成人の人もまじりて、退屈なきやうに半時はかりほどにかはりて學ぶべし。外書卷一、二ウ)
 禮の進退は手習讀書にて鬱する氣を轉すれば同日に教ふべし。

十三四歳よりは漸く禮の大なるを教へ云々。

又日をかへて音樂ををしへ、八九歳十一二歳の子には、笛箏築笙の譜を唱へしむべし。音律よき師に付て、十人も二十人も一度に習ふなり。

十四五歳より弓馬ををしふ。

數學は各々宿々にても學び、又日永く夜長きいとま、心懸次第、學校にても學ぶべし。(算數は才知をも長じ、六藝の一にて人事の用所なれば、なさでかなはぬものなれども、いやしき事のやうにとりなしてせざる人多し。いにしへの武士はかくのごときのつとめをばよくして、平生商人の様に利害の物語をばせざりき云々。數の本は利をとりあつかふにあらず、律算などは尤風流なるものなり。——外書卷一、三十五六歳よりは折々講堂に出て、よみたる書の道理文義を聽べし。

二十歳前後よりは自分に書を見て、不通所は附紙して問べし。(以上大學慈問第十九)

總じて人は聲のかはる時分より甘ばかり三十までも諸藝にいとまなくして、夜はねぶたきばかりなるやうにすれば、氣血とゝのほり、筋骨すくやかに成て病をな

さす、神知内にたくはへて利根聰明也。(外書卷一)

と、隨年教法といふやうな言葉は用ひてはゐないがその思想は蕃山にも——素行にも——あつた。即ち彼の思想は一言にして兒童の自然に従へといふにある。さうして細目に於ては詰込主義でない自發主義、鍛練主義でない溫和主義、速成主義、天才主義でない漸進主義、堅實主義等がうかゞはれる。

次に個性教育につきては、

世上惣じて人の氣質をとがむる心あり。人の氣質はとがむべき事にあらず。

(中略)然るに心長き人は心短かきをあしきと思ひ、心靜なる人は心にきやかなる人をあしきと思ひ、何れの生れつきにても、我とひとしからざるを惡敷とおもふ物なり。(中略)この天性の生れ付と善惡とは一つにはいわれまじき物なり。生れ付は外なるべし。(推我心書、卷中)

といつて、人に天稟の相違あること、天稟の相違は直ちにその人の善惡でないから、教師は自己の個性によつて直ちに相手の個性の善惡を定めてはならぬことを戒め、進んで

大かた文才に器用なる者は德行にうすく、德行によき人は文才拙きことあり。

知聰明なる生付の者は行かけやすし、行篤實なる者は知に足らざる所あり。君子は其善を取て備らん事を求めず。(和書卷一、一ウ)

といつて長所によつて人を用ふべきをすゝめ、更に

其身に道を行ふ事全からぬ人にも、文才に器用なる者には學問をさせ、ひろく文道を教へて人民のまどひをととき風俗をうるはしくし、其身に勇氣すくなき人にも、武藝に器用なる者には、兵馬をならはし、あまねく兵法を教へて人民の筋骨をすくやかにし、能をとげしむ。(同書、一)

といつて、人をすてず、ひろく益を取るべきことを説いてゐる。

さて右の方針に従つて人を教育するに當り、親特に父は如何なる心術態度をもつべきであらうか。要は心根に仁ありて常は嚴なるがよしといふ。曰く、

來書略、拙者せがれ御存知のごとく、うつけにてはなく候へ共、世間の習に入て氣隨我まゝにして道徳を好まず、諸藝も根に不入、かへりて父の非をかぞへ、諸同志の非をいひ、利口にして其身の行跡あしく、まことの奢れる子の不可用にて候。いかゞ仕てよく候はんや。返書略、一朝一夕の故にあらず候。貴殿の年來の養ゆへにて候へば、御子息の罪にあらず候。惣じて父と君とは、心根に仁ありて常は嚴なる

がよ、く候。人生は水火の二にあらざれば一日もたちがたく候。水火の仁ほど大なる事はなく候へ共、火は嚴なるものなれば、人をそれて用心仕候故に、心て火に近付て死する者はなく候。水は柔なる物故に、人々心やすく思ひ、近付て溺死する者おほく候。貴殿の病は柔和過たるにて候。柔和過たるは人のほむるものにてよき様に候へども、其門に不孝子いで、其國に不忠臣いで候。嚴なる主親は無理をいひても子も臣も怨みざる物にて候。たま／＼少しのなさけありても、天より降たる様によるこび候。柔和なる主親は、道理ありても子も臣もうらみ申候。(中略)親の柔和なるは其子のならひあしく、主君の柔和なるは家中の風俗あしきものに候。水の仁は母のごとく、火の仁は父のごとし、貴殿は母の仁にして御子息あしく成給ひ候。今に至てはげしくせられ候は、いよ／＼戻てよきことは有まじく候。(中略)貴殿今より火の仁は成まじく候間、水の仁にしていよ／＼徳を積給ふべく候と。師も亦同じかるべきであらう。

(和書、卷三、十六)

六 教育の可能とその効果

教育は如何にして可能であるか、又如何なる程度にまで可能であるか。これは教

育問題を論ずる上には極めて重要な問題で、不可能であれば教育といふことが最初から問題とならぬこととなり、如何程まで可能であるかによつて、努力の仕方なり程度なりにも相違が出て来る。若し又その程度と方法との間の關係が明かになり、どの方法を以てすればどの程度まで可能であるといふことが説明されるならば、教育の實際方面に與へる効果は甚大なものとなる。併し要するにこれは一種の形而上學で、明瞭に判定し得ぬのみならず、人によりてその説き方が異りもする。今まづその可能について蕃山の説を窺はんに、曰く、

心友問、人みな聖人たるべしといへり。迂闊なる様にもきこへ、又聖人を中心とすべき様に思へる者もある也。云、其全徳をいふ時は、聖人は神明不測の號なれば、平人のしらざる所なり。しかれども人の人たる實體は、聖人と異なることなし。人みな明德あり。大人は赤子の心を不失もの也といへり。學は後來の人欲を去て元本の天理を存することを學ぶもの也。此心天理に專にして人欲の私なき時は、則聖人の心なり。(和書卷一三、一九)

と、又曰く、

人と生れたる者は、聖人凡夫共に天性にをいてかはりなし。善を知惡を知るの

神明あらずと云ことなし。人々不義をにくみ、悪をはづるの良知是也。たゞ慎獨と自欺のたがひより千里のあやまりと成て君子小人の名あり。然ども一念自反して惑を辨へ、獨を慎み、過を改めて善にうつる時は、凡夫も君子となるべし。(和書卷六、八)

と、即ち人皆明德あり、故に人皆人となり、人をして人たらしめることができる。然して聖人凡夫共に天性に於て變りなし、故にすべての人皆聖人たるべし、すべての人皆神明たるべし、その至り得ざるはたゞその人欲を去つて元本の天理を存することを學ばざるが故である。故に一念自反して惑を辨へ、獨を慎み、過を改めて善にうつらば凡夫も君子となることができるといふ。故に又

來書略、昨日下午拙不善ありき。とげてかくし可申とは存せすながら、申は出ざる内に、先生すでに肺肝を御覽せらるゝと覺候き。といふに答へて、

返書略、愚拙いかで人の不善をさぐり申べき。何事の候つるやらん不存候。貴殿の心に明德あるによりて、肺肝を見らるゝ様におぼえ給ひ候なり。貴殿と我等とにかぎらず、惣じて不善ある人の氣遣かくのごとくに候。大學の旨も、君子より

人の肺肝を見にはあらず、小人みづから肺肝をみらるゝごとくくらしきにて候。性善の理明白なる事に候。(和書卷一、三)

といつてゐる。既に人に良知神明あり、故に恥を知り善を好むの心機にあひ折にふれてあらはれずといふことなし。即ち人の性は善である。故に人は惡を去つて善に進むことができる。この故に又これを導いて惡に遠ざかり、善に進ましめることができるといふのである。即ち教育は可能であるといふのである。

然らば教育の効果については蕃山は如何にこれを考へてゐたか。既に前述の如く、人皆明德あり、聖人凡夫共に天性に變りなし、故に人皆聖人たるべし、君子たるべしと考へた蕃山にあつては、教育の効果は樂觀的なものとなつてあらはれざるを得ぬ。曰く、

八歳より三十まで如是習はずときは前節教育の方法参照士文武に達し、國用備はれり。其中道徳に通ずる人あり、才能秀るものあり。天下國家人なき事をうれへず、子の親々もみづから學ばざれども、子の道藝に通ずるを見て心和し、粗理を聞て惑はず、生れ付器用にして終に不學ものは、老學なれども早く經義に通ずるものなり。學びたる子供やがて人の親となれば老て教ふべし。幼年には悌順を學び、

壯にして行ひ、老後に教へ、五十年の間には君子國となるべし。是日本の中興にあらずや、(大學或問、第十九)

と。この點から見ると、蕃山は、ライブニツツやカントにも劣らぬ、所謂教育上の樂觀主義者であつたことが知られる。

前號補遺 八月號五十八頁十四行一字目「と。』の下に左の文を加ふ。

學ぶに己が爲にして人の爲にせず、然してこゝに己が爲すとは、いふまでもなく道を身に行ふの謂であり、人の爲にすとは道を粥ぐの謂である。道を身に行ふは君子であり、これを粥ぐは小人である。既に小人たり、如何に勞すと雖も遂に何程の事をなし得んや。故に蕃山いふ。

聖人の道は五倫の人道なれば、天子諸侯卿大夫士庶人の五等の人學び給へき道なり。別に儒者といひて道者あるべき様なし。學問を教て、産業にすべき人あるべきにあらず(和書卷一、十八ウ)。

と。學問を教て産業とする人の學問は即ち人の爲の學問である、小人の學である。人の世に人に師たるの職にあるもの猛者すべきであらう。